

梅鶯仏教壮年

第25号
2005年
8月14日

次回例会

期日：9月23日（金）

夜7時～8時半

9月23日・24日に予定しております。また、**聞法親睦旅行**を、諸般の事情により本年度は**中止**し、9月23日（金・秋分の日）に通常の例会を開催いたします。

現在猛暑の毎日ですが、次回例会の頃は、過ごしよい季節となることでしょう。

皆さんのご参加をお待ちしています。

悠久のロマンに満ちた中央アジアの地

シルクロードへの道

遠くアラビアや中国を結びつ

ける商人たちの往還の道であり

ましたが、私達にとっては仏教

がインドから伝来された掛け替

えのない道でもあります。

シルクロードを通り中国から、

はるか天竺（インド）に向かっ



て仏教を求める命がけの旅をした玄奘、三蔵などの僧、逆に天竺から中国へ、仏教の真理を伝えようとした鳩摩羅什などの僧、かれらに思いを馳せるとき、お念仏を頂く身に思ひをなれたこの私が、ありがたくも不思議な存在にさえ感じます。

その新疆ウイグル方面の砂漠を、本初夏に森勝昭夫妻が旅してこられました。本号では夫人に紀行文を、次号からは勝昭氏の旅行記を連載させて頂きます。

仏教伝来の道をたづねて

森やす子

介護が終わった直後に、仏教伝来の道シルクロードのツアーにおさそいを受け二人で母のプレゼントをうける様な思いで中国北西部新疆ウイグル方面の砂漠を六月下旬に旅してきました。

上海、西安、敦煌

程度の地名の他は何

の知識もなく不安を

抱き乍らの出発でし

たが、すばらしい旅

仲間と共に楽しく感

動の旅を終えること



が、い、ほんの一部を歩いただけとは、中国の広大さ、歴史の古さなど、垣間見た思いです。

飛行機で三時間飛んでも、ところどころに緑が点在している。他は砂漠で、目にする山々は木一本はえていない。岩のついた山は、括弧で、他は天山脈として一括されている。大様さで

ウルムチ（美しい草原）の南山牧場では、馬に乘ったり遊牧民の住居パオで伝統衣装や食事の体験、十カ所以上めぐった石窟や古城遺跡で、は、ろば車やらくだに乘ったり、暑さで歩けぬ日中は昼寝して夕方から夜中（十時過ぎでも明るい）の観光もあるなど、異色の体験づくめでした。

イスラム教徒が殆どというウイグル地区のモスク（寺院）を訪れても、仏教寺院とのちがいがよく通じました。聞は一見にしかずの感じでした。

旅の庄巻は世界遺産敦煌の莫高窟、数百ある石窟の壁面が千々に仏像や千仏の経ても色鮮やかに残っています。



大仏前で唱和した三帰依文が洞窟にこだました時は、感きわまつて涙があふれ出し、保護育成された代々の国王や玄奘三蔵、鳩摩羅什様はじめ沢山の僧方がインドから広大な砂漠をこえて日

題材法話

○正信偈を味わう②

前回「菩薩物語」のお話でした。法蔵

光「つぎは、」普放無量無辺

照「ままでの6句を味わいま

と宣言して、いたした阿弥陀様ですが、ではその阿弥陀様とは、

「普放無量無辺光」からの、

○十二の光

阿弥陀仏とは、もともとインドの言葉で「ひかりと

経には、阿弥陀様



の働きは、十二の光の名を

の光に照らされたものは、こ

煩悩が消え去って身も心も

やわらぎ、ふたたび苦しむ

ことをなく、臨終の後にさと

りを得ることができると

説かれていきます。

とはどんな光なのでしょう

か。6句の最初の「普放無量

無辺光」の普放とは「あま

ねく」広く全てに「放つ」

という意味で、その後、十

二のひかりの名が出てきま

す。順番に見ていきます

と、

「無対光」の四つの光を味



○無量光―かぎりない光

は、量が無限の光という意

味で、つまずきながらも阿弥

どんな時にでも阿弥陀様の

願いは働き続けます。

う意味であり続けます。

無量に存在する私たち

阿弥陀様の働きも無量でな

ければなりません。

けたとえば、日本では通じ

るけれどもアメリカでは通じ

し、鎌倉時代までは通じな

いけれども平成では通じな

い教えでもどこでも「無量

教えである。それが「無量

光」という阿弥陀様の働き

です。



とところがその医者が、

「ただし百人全員を助け

ることは無理です。」と

云ったかどうか

？

そうならばそれはけ

して「救われた世界」で

はなくなるのです。

それでも「全員が救わ

れないまでも、救われる

可能性があるのだから良

いではないか」と云う人

がいるかもしれない。

でもその考え方は所詮

「人ごと」なのですね。

この私自身の真剣な問

題であれば、「ひよつと

もしれない」ではだめな

のです。

「間違はなく、もれな

く救われる」世界でない

とだめなのです。

この間違った救いの

の世界が、「無量光」と

讃えられる阿弥陀様の本

願の働きなのです。

以下次号

（7月例会 住職法話より）

